

総社市神明遺跡における銅鐸の出土について

1 出土遺跡

総社市福井^{しんめい} 神明遺跡（東総社駅の北600m）

一般国道180号総社・一宮バイパス工事に伴い発掘調査を実施。

総社平野に所在する集落遺跡で、弥生時代後半期（約2,000～1,800年前）の住居や建物などからなる。

2 出土銅鐸の概要

高さ31cm、幅約16cm。

外縁付鈕式^{がいえんつきちゆうしき}ないし扁平鈕式^{へんぺいちゆうしき}に分類される銅鐸で、弥生時代中期（約2,200年前）に製作されたものである。

（銅鐸の型式：菱環鈕式^{りょうかんちゆうしき}→外縁付鈕式→扁平鈕式→突線鈕式^{とっせんちゆうしき}）

現在文様は判然としないが、帯を田字形に配置する四区袈裟襷文^{よんくけさだすきもん}の可能性があり、長期にわたる使用により摩滅しているなどが考えられる。

銅鐸は、東西60cm、深さ30cmの穴＝埋納坑^{まいのうこう}に、横向きで緒^{ひれ}（側面の張り出し）を上下に立てて埋納されていた。弥生時代後期初め頃（約2,000年前）以降に埋納されたと推定される。

3 意義

発掘調査中に銅鐸が発見されたのは全国で20例目、県下では、平成元年に発掘調査した岡山市北区高塚遺跡^{たかつか}に次いで2例目となる重要な発見である。

神明遺跡では銅鐸の埋納に関連する土器が比較的多く残されていることから、埋納の時期を今後の調査で絞り込むことができると考えられ、資料的価値がきわめて高い。

4 今後の予定

銅鐸がどのように埋められたのかを知る手がかりが、内部の土から得られる可能性があるため、国立文化財機構奈良文化財研究所の協力を得て、まずX線CT調査を実施する。その後、サビ落としを行い、文様構成の検討、同じ鋳型で作られた製品の有無などの調査、金属成分の分析等を行うこととしている。

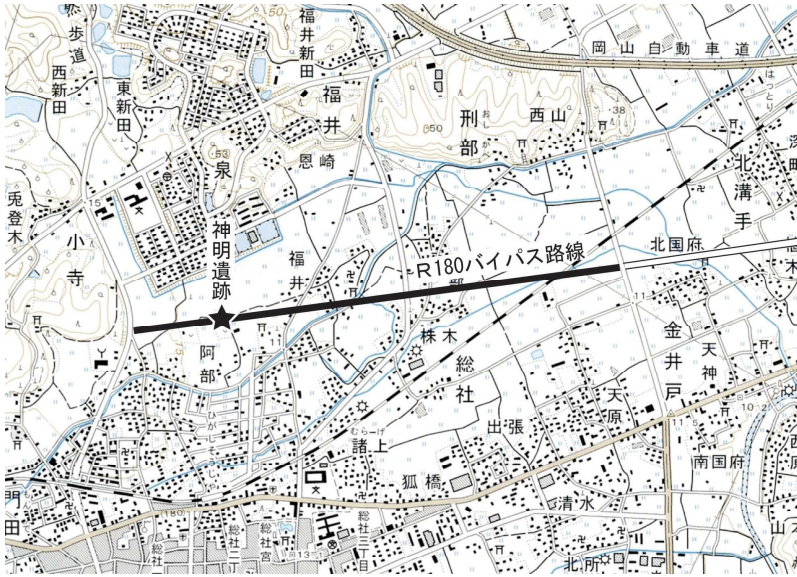
こうした理化学的な調査と、付近から出土した土器破片の検討によって、銅鐸の製作年代や埋められた時期の詳細がわかり、銅鐸のまつりについて考察する資料が得られると思われる。

5 資料の公開

9月13日 古代吉備文化財センター開所30周年記念シンポジウムで緊急公開

9月20日 現地説明会開催

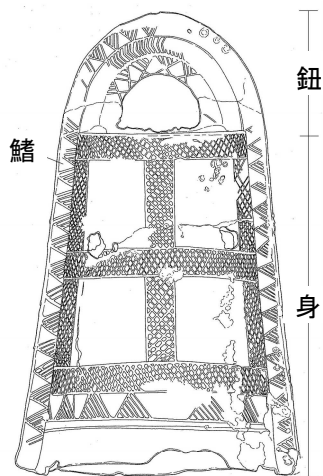
サビ落とし終了後、古代吉備文化財センター、県立博物館等において展示を予定。



遺跡の位置



銅鐸と埋納坑（横向きに埋められている）



四区袈裟襷文の銅鐸
（島根県出土）



出土の銅鐸